第 2015-34 号

恵みと真理のニュース

2015 年 8 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］　世の欲と悩みを全部下ろして主だけ信じて委ねる私に尊い使命を担えるような力と健康と経済的に溢れる恵みをくださいました

私は21歳若い時に結婚して子供を産んで生活するなか職場の事で1984年夏にカンミョンからアンサンに引越ししました。慣れてないところに引越しして新しい人々と交わりが必要だった私に隣りの家に住む恵みと真理教会の執事が新設に接してくださり、その方の勧めで始めて出席しました。当時アンサンに聖殿が建てられる前だったので放送してない道を走ってアンヤン聖殿まで行って礼拝を捧げました。しかし、以前からもっていた神様に対する不信と教会に対する否定的な先入見を壊すのがやさしくないでした。特に区域礼拝の時に区域長を驚かせるほどの否定的な言い方と質問が多かったです。二番目の子を産んでからは教会が遠いといういい訳をして教会を行かなかったです。
そうするうちに二番目の子が一歳の誕生日の1985年4月最後の主日の夜でした。早く寝ようとしましたが寝れなくて心が苦しくなりました。ベランダにあるソファーで横になったら寝ると思って布団を持ってソファーで横になりました。どころが、寝れない状態なのに体の動けなくなり精神だけははっきりしていました。おかしい状況でした。
今までの否定的だったサタンの存在と歴史を認識してすぐ死ぬような感じがしました。とても恐くて旦那を呼ぼうとしても口が開けられませんでした。どうしても抜けられないほど恐ろしかったです。その状況で私も知らずに“主よ！”と叫びました。すると、体を動くようになりました。
その時にとても恐くてその後一週間は話が出来ませんでした。とても理解出来ない状況を経験して死を考えるようになって神の存在を知り主を信じるようになりました。神様を信じて支えると生きると思い家の近くにある教会を行きました。一番後ろの席に座って賛美をしたら涙を止まらないほど流してみんな私を見ているにも続けて涙を流しました。
二番目の娘が5歳の頃経済的の苦難で少ないお金を集めて事業を始めました。しかし、収入はなく続ける投資で謝金だけ増えました。前が見えない道を歩くような苦難の生活が何年間続きました。そうして体も精神的にも倒れて死にたいほどでした。聖徒なのでそうしてはいけないし“なぜ、私だけこんなに大変なのか？神様を恨みました。婚家の事で心が限りなく剛腹になった旦那はもっと苦痛を与えました。10年間神経性の胃炎でストレスによって神経不安症が続けて精神病の治療薬も何年間飲みました。
これから私の無気力と様々な高慢を深く悟り神様に慰めの祈りをしました。事業をしたのも神様に聞かなくて人間的に考えて行なった事です。私の信仰を振り替えてみて慰め祈りをしながら新しい心で神様の御言葉を暗記し黙想しましたが 、“恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。”（イザヤ41：10)御言葉が私の心に強く聴かれました。両手を合わせて祈りました。“全ての心配を主に下ろします。これからは主を神様を仰ぎ委ねます。神様がやってはいけないと言われたらしなくて神様がさせるとどんな事でも従順します。”すると不安な心がなくなり主が下さる慰めと平和が私の心に川のように溢れ心が平安になりました。
解熱剤も使えられなくて高熱で病弱な患者達を考え祈りする心を与えて下さり、小さいことでも神様の恵みを感じ神様に感謝するようになりました。そしていつどこでも神様が私に願うものが何か考えたて行ないました。周辺の人々に思った憎む心が愛で変わりました。そして、手術が日を受け急性甲状腺病気を手術を受けないほど急に健康になり、無関心だと思った姑と体が痛かった私に精神力が弱いととがめた旦那の態度も変わりました
今まで信仰生活をしながら様々な世のことにも関心をもってやりたいことも多かったですが、動く力だけあれば主の喜びと神様の言えこうをため支えると告白するまで至りました。
今まで旦那共にした仕事も主に祈って神様の御心ではないのだっと思ってやめました。そして、慣れていた今まで通っていた教会で様々な問題と発展と進歩がないので1997年新しく恵みと真理教会に戻って礼拝を捧げました。その間コウザン同に建てられた聖殿の姿と御言葉と聖霊充満な礼拝が実際に感激でした。教会で登録してすぐ水曜礼拝の聖歌隊で奉仕しました。
今まで礼拝に疎かにした旦那も教会で熱心に主日礼拝をしました。神様のそんな私達に溢れる恵みと祝福を与えて下さり1年半年ぶりに小さい光栄住宅からシハ新都市内にある広いアーパトを分譲受けて引越しました。その間シハ聖殿も建てられ喜びと感謝でした。
私の信仰生活を振り替えてみるとまるで まるで鮭が産卵の際になって生まれた川へ回帰したのと同じだという考えをします。日々が楽しくて祝福ある信仰生活をするため導く神様の摂理と愛に感謝します。時間が経っても 角張った石のようなものを磨いてくださり主の事を通して真の楽しむと価値の満足と幸せを享受するようにします。私のような主を信じて支えて祝福を受けた人がいるでしょうか？
私は年取った親の末子で生まれ兄の助けでやっと商業高等学校を卒業してすぐ就職しました。思いきり習わなかった事と親から充分な愛を受けなくて自尊感が低くて心の傷は私を苦しめました。シハで引越ししたばかりの時に児童区域長と余地部聖歌隊の教師の職分を下ったが子どもを育っだてるのも何年前だし子供達をあまり好きではなかったのでどのように担えるか漠々としました。使命をよく担えるため子供神学を勉強して子供達と共に賛美をして私も神様の子供として自尊感が回復されました。中高等部の聖歌隊を担当する部署で賛美チームを作る任務が任されて賛美新学校にも通いました。
また、大人聖歌隊で指揮者として献身したくて遠いキンチョンまで通い専門大学を卒業をしました。また、大学3年のときに指揮者科に編入して夢だった卒業する時にかぶる帽子を被りました。そして聖歌隊の指揮者として献身するビジョンを成し遂げました。
子供の時から抱いた学びの夢を適えるように私にさめない熱情を与えて下さり忍耐と誠実に勉強するように導いて摂理したかみさま、尊い職分を下さり時によって新しい力を下さる神様に感謝します。神様の栄光と聖徒の恵みと教会のため足りない私を信じ協力してくれる聖歌隊員達にもありがたいです。主の事だけ考え委ね主の事をするため10年間以上勉強をしたら神様は私に経済的にも恵みを与えて下さり病弱な私が平日礼拝と主日礼拝の聖歌隊の指揮者だけでなく土曜日に掃除奉仕までしても疲れないように健康に見守ってくださいました。
物質の欲を捨て主が下さる経済的の苦難なく見守ってくださり、体の病気も主に委ねたら健康になりました。植えたとおり取り入れる体験を通してよく知っています。それで、主が下さる恵みとプレゼントを考えたら忍耐できます。忍耐する力も神様が与える恵みです。今まで私が願って求めたものより結局もっと良い物を下さり、守ってくださり明日大きい恵みを与える神様を賛美します。最後まで相変わらず主を愛し賛美し生きる事を決心して全ての栄光を主に捧げます。

［信仰コラム］　あなたは救いを受けたのですか ？

“あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である”（エペソ人への手紙, 2:8)

“あなたは救いを受けたのですか?” と質問を投げた時　人々の返事を何種類に予想することができます。 断定的で確信におかず返事をする方がいるかと言えば、ためらう態度であやふやな返事をする方がいるでしょう。 また “救いと言うのは何を意味することですか?” と聞き返す方もいて、“私は救いをもらいました。” と答えるが救いに関して間違って理解している人々もいます。

第一に、“救いと言うのは何ですか”という質問に対する答をよく見ます。

旧約聖書で ‘救い’という言葉は、自らは到底に抜けることができない極甚な苦しさや大きな危険から引き上げ出してくれる事に適用されました。 エジプトのしもべになっていたイスラエル民を神様が主権的に導き出して約束の地で導きました。 このような特別な事件外にも、救いの意味は困境から救出された後に享受する保護と引導の状態、そしてずっと維持される安全と豊饒の状態まで包括しています。 しかしさまざまな理由によってそういう状態が持続することができないという事実が立証されました。 だからイスラエル民は社会的でも政治的にさらには肉体までも完全に変化されて決して苦難がない永遠な幸せを意味する救いを切に望むようになりました。 このような終末論的な救いに対する神様の計画と約束が予言者を通じて予言されたし、また新旧約の聖書を通じてその救いの真理が完全に啓示されました。
聖書に啓示された救いと言うのは罪からの救いを意味します。 また救いと言うのは神様の審判からの救いを意味します。 すべての罪人は神様の震怒の下あります。 神様の震怒は究極的に最後の審判で現われます。 肉体の死が人間存在の終末や消滅ではないです。 それだけではなく救いはまた他の豊富な内容を含んでいます。 行為によった義ではなくて完全で完全な神様がくださる義を着させます。 神様がくださる新しい生命を受けて永生を得るようになります。 神様の子になって美しくて栄える天国で永遠に暮します。 私たちの肉身がまた起きて栄えて美しくて神秘な身に変化される復活に参詣するようにします。 だから人がこの世の中に住む間に救いを得るよりもっと至急で重大な事はないです。

二番目で、このような救いをどのようにして得ることができるかをよく見ます。

本文に “あなたがたがその恵みによって … 救いを得たのだ”と言いました。 ‘その恵み’とはイエスキリストにあって現われた神様の愛を言います。 そして ‘その恵み’とはイエスキリストのあがないを意味します。 イエスキリストを送った神様の愛とイエスキリストのあがない使役、これが私たちで救いを得るようになった ‘その恵み’です。 世の中のどんな宗教も、あるいは人々のどんな努力も救いを得ることができないです。 ‘その恵み’ 外には他に救われる道がないです。 次に “あなたがたが 信仰でよって救いを得たのだ” しました。 救いに至る信仰は二つの要素で構成されています。 その恵みに対する知識と徹底的な収容、この二つです。 知識が先にです。 神様のお言葉に対して分かることが多いほどもっと多い信仰を持つことができるし ‘その恵み’に対する ‘知識’を持ってこれを信仰として救いを得るようになるのです。 その次の知識に付け加えて徹底的な収容をしなければなりません。 徹頭徹尾収容すればよる標的があります。 ‘その恵み’に対するお言葉すなわちその知識に自分を完全に頼って出して任せます。 そしてこれによる感謝と喜びが心の中に常にあります。

人が一生を生きるうちに接することができる一番偉大で聖なる機会は神様すなわち私たち主イエスキリストの父がキリストにあって施したその恵みが分かることでそしてその恵みを信じるのです。 そして救いを得たのです。 “あなたは救いを受けたのですか?” という質問に対してその意味が何やら確かに分かって “はい、私は救われました” と言える人より幸せな人はいないです。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム ‘緑の牧場、清い川’ 本の語り中」

とても特別な人

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

事物は分類する基準によって多様に区分されます。 聖書の基準によってすべての人を分類したら義人と罪人、イエスキリストの中にいる人とイエスキリストの外にいる人、神様の子と悪魔の子、天国市民と地獄の子、生まれかわった人と生まれかわることができなかった人、永生を得た人と滅亡する人などで両分することができます。 そして普通人と特別な人で区分することができます。 特別であるということは普通と区別されるように他のものを示して概して良い意味で使われます。 特別な人と認められて特別な待遇を受けることを厭う人はいないだろう。 今日は特別な人に関して調べようと思います。 イエス様を信じる人はとても特別な人です。 その理由をよく見ます。

第一、イエス様を信じる人は所属が特別です。

復活したイエス様は弟子に約束したとおり聖霊を送ってくださいました。 聖霊充満を受けた弟子が福音を伝えたら多くの人がイエス様を信じるようになりました。 すると教会に対する逼迫が本格化されて多くの信者が逮捕して監獄に閉じこめられました。 これによって信者がエルサレムを発ってベニゲとグブロとアンデーオクなどで散らばって福音を伝えました。 アンデーオク教会は異邦宣教の前哨基地になってキリスト教の歴史にいて大きいパーセントを占める教会になりました。 ここに一つ得意するに値する仕事があります。 アンデーオク人々がイエスキリストを信じる人々を示して初めで ‘クリスチャン’ と呼びました。これは “キリストを追従する人” または “キリストに属した人” という意味です。 基督教会はこのような区別された名前を嬉しく収容してそのまま使いました。 この名称が 2 世紀初に至ってはキリストを信じる人々の公式名称になりました。 皆さんが “私はクリスチャンです。” と言えば “私はキリストに属した人です。” という言葉と同じです。

イエス様を信じる人は自分がキリストに属したという所属意識が確固不動して自分の所属を明らかにすることをためらってはいけないです。 使徒パウロは彼を憎んで逼迫する者等から告訴に受けられて裁判を受けました。 パウロはベスト総督とアグリバの前で審問を受けるようになりました。 アグリバ王がパウロに言うのを承諾するとパウロが弁論し始めました。 パウロは彼が訴訟受けている理由を説明しながら救主になったイエスキリストを伝えました。 するとアグリバ王はパウロに言うのを “君が一言二言言葉やを勧めてクリスチャンにならせようとするのなのか?” しました。 するとパウロが言い返しました。 “言葉が少ないとか多いとか王だけではなく今日私の話をきくすべての人々もこんなに結縛されたこと以外には私のようになるのを神様に祈ります。” 罪の赦しを着て結縛されてひかれて出たパウロの行色は見すぼらしかったが彼の態度と音声は堂々で確信でいっぱいになりました。

パウロは自分がキリストに属した人になったことを非常に誇らしく思いました。 そんなにして “私は私の話をきくすべての人々が私のようになるのを神様に祈ります。” と力を高めて言いました。

聖書は救いが所属に関わっているのを啓示しています。 所属はその人がいる位置を現わします。 キリストに属した人はキリストの内にあります。 ノア時代に神様が洪水で世の中を審判なさいました。 すべての人が死んだが箱船の内にいる人々は生き残りました。 滅亡と救いはその人がどこにあるのかに関わっています。 箱船の内にある人々はすべて生き残したし箱船の外にある人々はすべて死にました。 箱船はイエスキリストの模型で影です。 どこにいるのか? どこに属したか? することが救いと滅亡の差を持って来るのです。 救いをもらった人はイエスキリストに属しました。 どこへ行っても何をしてもイエスキリストの内にあります。 これは世の中のどんな所属とも区別される特別な所属です。 だからイエスキリストに属した人はとても特別な人です。

第二、イエス様を信じる人は生の方法が特別です。

イエス様を信じる人は聖三位の神様の助けることと福を与えるのを信じて切に求めながら生きて行きます。 イエス様を信じる人は神様の助けがなければ何もできないのを知り合いです。 “成熟した聖徒は祈らない。” “神様に日常的な問題を解決するために祈ることは幼稚な信者が行うのである。” という教えは聖書に行き違う教訓です。 聖書には神様に切に求めなさいというお言葉がたくさん記録されています。

“わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。”(エレミヤ書, 33:3)、“求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。”(マタイによる福音書, 7:7)、“また、よく言っておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。”(マタイによる福音書, 18:19)、“あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。あなたがたは、求めないから得られないのだ。”(ヤコブの手紙, 4:2) しました。

イエス様を信じる人は最善をつくして努力して、積極的に祈りながら神様の引導と決定に任せます。 神様の約束をつかんで信仰で切に求める人のために神様が働くはずで彼の善良さとさらなる知恵として最善の道で導いて回答します。 私たちが祈って任せればまずに神様が私たちの心に平安と胆大さと喜びをください。 神様の助けることと福を与えるを求めて回答を期待して神様に任せるのがイエスキリストを信じる人が生きて行く特別な方法です。

第三、イエス様を信じる人は生の理由が特別です。

イエス様を信じる人は “キリストのために” 生きて行きます。 “キリストのために” 生きて行く人にはキリストよりもっと尊く思うのがあってはいけないです。

ある日イエス様がペテロとヤコボとヨハネを連れて高い山に上がりました。 キリストが祈る時その顔が日のように輝いて、その服が光彩が出て白くなりました。 その時モセとエリヤが一緒に光栄の中に現われてイエス様といっしょにお話を交わしました。 居眠っていた弟子が覚めてこの驚くべきな光景を見ました。 モセとエリーは二人が離れる時にペテロがイエス様に “神様よ、主がもし望めば私たちが草幕三つを作るが一つは主のために、一つはモセのために、一つはエリヤのためにするである。” と申し入れました。 その瞬間忽然と“たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。” としました。 弟子がきいて伏せて恐ろしがりました。 イエス様が私どもに手を出しながら “起きなさい恐ろしくてないで。” するので見回したらイエス様外には誰も見えなかったです。 ここに啓示された重要な教訓の中一つはどんな事物、どんな人あるいは天使でもイエス様以上にあるいはイエス様と等しく思うのは対象があってはいけないというのです。

“キリストのために” 生きて行く人にはすべての事の判断基準がキリストです。 新約聖書が記録される当時の初代教会にはユダヤ人の食べ物と節期の遵守に関する慣習が影響を及ぼしました。 肉を食べることと菜食することそしてどの特定の節期 や日を重要に思うことなどが問題で頭をもたげました。 このような問題に対する返事に記録されたお言葉がローマ人への手紙 にあります。 “日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する。すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。(ローマ人への手紙 14:6,8). 信仰生活において非本質的な問題を基準にして判断して定罪することは無益とか有害です。 すべての事を自分の中心で解釈して自分のために判断しないようにしなければなりません。 イエス様を信じる人は生の理由が特別です。 すべての事の判断基準が “キリストのために” です だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。 (コリント人への第一の手紙, 10:31)。 “そういうわけだから、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。” (コリント人への第二の手紙, 5 :9)

イエス様を信じる人はどこで何をしても特別な所属意識があります。 “私はキリストに属した。” という所属意識です。 イエス様を信じる人には特別な生の方法があります。 すべての事に最善をつくしながら神様を頼ります。 聖父聖子聖霊に助けを求めて福を与えるのを切に求めます。 神様の回答を期待します。 神様に任せます。 イエス様を信じる人には特別な生の理由があります。 神様のために生きて行きます。 キリストが一番であり優先で中心です。 判断の基準です。 だからイエス様を信じる人は普通人ではないです。 特別な人です。 聖徒の皆さんは自分がとても特別な人という認識を持ってそこに適当な態度を取りながら生きて行くように願いします。